

特集 中池見湿地の保全と北陸新幹線ルート変更問題

フィールドシンポジウム

「中池見湿地の保全と北陸新幹線ルート変更問題」を開催して

奈良大学 岩 崎 敬 二

Comments on the field symposium "Conservation of Nakaikemi Wetland and construction of the Hokuriku-Shinkansen". Keiji Iwasaki (Nara University)

はじめに

2013年10月13日、福井県敦賀市で「中池見湿地の保全と北陸新幹線ルート変更問題」というフィールドシンポジウムを開催した。日本生態学会近畿地区会自然保護専門委員会と関西自然保護機構とが共催で企画し、同学会近畿地区会から資金援助を得て、その公募集会という形で開いたものである。ここでは、その内容と議論などを紹介する。

福井県敦賀市にある中池見湿地は、数多くの絶滅危惧種が生息し、2012年7月にはラムサール条約にも登録された、現在の日本ではきわめて貴重な湿地として評価されている低層湿原である。しかし、その登録直後の昨年8月に、2025年開通予定の北陸新幹線のルートがこの湿地の一部を横切するような変更案が公表された。このルート変更は、中池見湿地の生態系に大きな影響を及ぼす可能性が高いため、関西自然保護機構は、2013年3月3日に、大阪市立自然史博物館でシンポジウム「中池見湿地の保全と新幹線建設問題」を開催し、その問題点を明らかにした。その講演記録や議論の内容などは本誌の前号（第35巻1号）で紹介されている。

今回のフィールドシンポジウム開催の目的は、中池見湿地の現状を視察し、北陸新幹線が湿地の

どの部分を通るかを現地で確認した上で、この新ルートが湿地の自然にどのような影響を及ぼすかを考え、さらに、私たちは今後どのような活動をしていくべきかを、現地で検討することであった。そこで、当日は、午前中を現地見学会とし、午後を室内でのシンポジウムの時間として企画した。日本生態学会近畿地区会自然保護専門委員会からは私（委員長）と三浦励一氏（京都大学）、関西自然保護機構からは石井実会長（大阪府立大学）と平井規央氏（大阪府立大学）、大久保その子氏（大阪市立自然史博物館）が中心となって、準備にあたった。

第一部：現地見学会

中池見湿地での現地見学会の参加者は、総勢で42名であった。10時15分頃に現地に到着し、NPO法人ウェットランド中池見代表の笹木智恵子さんに現地の説明をしていただき、北陸新幹線の新ルートが通る「後谷（うしろだに）」と呼ばれる部分の現況を確認しながら、約3時間かけて湿地を見学した。その途中、平井規央氏とその研究室に所属する学生の方々には、（許可を得た上で）採集した水生昆虫などの説明をしていただいた。淡水産珪藻の専門家である大塚泰介氏（滋賀県立琵琶湖博物館）も参加し、珪藻の観察や説明を行った。

琵琶湖博物館)からは、この湿地に生息する珪藻や水質の説明をしていただいた。

かつて、この湿地を研究対象としていた方々が何人も参加されていたが、異口同音に、湿地のあちこちでヨシなどの抽水植物群落が拡大しており、乾燥化が進んでいる、との感想を述べておられた。また、湿地の西側には国道8号線のバイパスが通っているが、その建設前に比べて、湿地の西部にある恒常的な水域部分が拡大しており、このバイパスの建設で湿地西部の地盤が沈降しているか、わき水の流れが大きく変わっているのではないかと、との声も聞かれた。

第二部：シンポジウム

「北陸新幹線建設が中池見湿地の自然に与える影響」

午後2時から、敦賀市福祉総合センター「あいあいプラザ」に会場を移して、以下のようなシンポジウムを開催した。参加者は55名であった。

- ・主催者挨拶：石井 実氏（大阪府立大学）
- ・中池見湿地の希少水生動物：平井規央氏（大阪府立大学）
- ・中池見湿原堆積物の花粉化石からみた最終氷期以降の植生変遷：宮本真二氏（岡山理科大学）
- ・危惧されるラムサール条約登録・中池見湿地に及ぼす北陸新幹線の影響と現地の動向：笹木智恵子氏（NPO法人ウェットランド中池見）
- ・新幹線ルートと中池見湿地の水生植物－危惧される影響：角野康郎氏（神戸大学）
- ・山地源流域の山体地下水が雨水の流出に果たす役割：小杉賢一朗氏（京都大学）
- ・総合討論

宮本真二氏と角野康郎氏、小杉賢一朗氏のご講演の内容は、この特集の次頁以降に掲載されているので、それを読んでいただきたい。

総合討論では、7名の参加者が質問や意見を述べられて、講演者も交えて活発な討論が行われた。主なご意見は以下の通りである。

- ・現状では、事業主体も研究者からの要望に対応する行政機関もわかりにくいので、それをはっきりとさせるべきではないか。
- ・トンネル掘削とルート変更による湿地水位への影響は、予想外のことも起こりえることがわかったので、このシンポジウムでの議論と懸念を、事業主体や敦賀市に伝えるべきだろう。
- ・昨年6月にラムサール条約登録地となったため、湿地の管理計画があるはず。それが明らかにされていないようだが、その管理計画にこの問題を組み込むよう、働きかけるべきだろう。

このような議論を踏まえて、今後は、1) トンネル掘削による湿地周辺の山体地下水や湿地水位への詳細な影響予測を行うよう、国土交通省、環境省、敦賀市に働きかける、2) 新幹線ルート変更問題も含んだ湿地管理の在り方について、専門家も交えて検討する委員会を設置するよう敦賀市へ働きかける、などの活動が必要であろうと考えている。このフィールドシンポジウムの実施を契機として、現地で中池見湿地の保全活動に従事しておられるNPO法人の方々や関西自然保護機構の皆様とともに、健全な湿地生態系の保全と管理を進めていければと思う。

最後に、このフィールドシンポジウムの開催にあたって多大なご援助とご協力をいただいたNPO法人ウェットランド中池見の笹木智恵子さん・笹木進さんご夫妻、企画の立案にあたって情報やご意見をいただいた村上興正氏（京都精華大学）と前迫ゆり氏（大阪産業大学）、会場準備等をしていただいた京都大学大学院農学研究科農学専攻雑草学研究室に所属する大学院生の皆様に、厚く御礼申し上げる。